

『教育科学研究／実際家のための教育科学』一九五三年五月（二葉）

教材研究の視点

矢口 新

（一）

教材とは人間を形成する媒介となるものだということは何人もよく知る所であろう。子供の周囲にあつて子供が育ちゆくのに何等かの役割を果たしているものは、広い意味でみな教材と考えられる。このように考えると教材と人間、この場合特に子供と考えてよいがこの関係は様々なものがあることがわかるであろう。即ち子供がその教材に働きかけ、或はそれから影響をうけるそのあり方は、決して一様でないのである。例えば、子供の常住生活する教室に美しい絵画がかけられているとする。教師が別にそれについて説明をするでもなく、ただ子供の環境を形造る要素となつてに過ぎない。併し子供はその絵画を毎日ふとした折りに眺めやる。その繰返しの間に子供に美というものに對す心情を啓培される。そうして若しその絵が外されるようなことがあると何か淋しさを感じる。たとえその絵でなくとも教室に美しい絵を掲げて心の落ち着きを得たいと欲するようになる。こういうことは事実あることであるが、この場合、絵は人間を形成する媒介となつてゐる。どういう形成かという点、美に對する心情を養うという形成であり、そういう形成のための教材となつたのである。

所がその同じ絵がそういう形でなく、例えば教師が構図ということを子供に説明する時に使用されるとする。子供はその絵の構図關係を

分析して、或は自らその模作をし、それによつて、美を表現する場合の描かれるものの位置關係のとり方についての技術を身につける。これは絵が技術を形成する教材となつたのである。

かくの如く一つの表現物でさえも、それは様々な教材としての役割を果たすのであつて、その場合教材としてはそれぞれ異つた性格を発揮していると思ふなければならない。このように教材が様々な關係をもつて子供に結びついていくのであるから教師が教材を提出する場合に如何なる教材を如何なる役割を果たさせるために提出するかということについては充分計画して置く必要があるのである。即ち教材を利用する場合にそのねらいをはつきりさせておく必要があるのである。

所が現在小中学校で行われている實際の学習をみると、この点について極めて曖昧なものが多いように思われる。否、むしろそういう自覚がないのではないかと思われるのである。例えばよく見うけるのであるがラジオを子供に聞かせるのにそれがどんな内容のものであると、ノートと鉛筆を持たせて書き取らせている。聞き終つて、教師がどんな内容であつたかを質問してよく理解したかどうかを、また憶えているかどうかをしらべる。放送の内容が何であろうとすべてそれを理解の對象として取扱つてゐるのである。それ以外にラジオという形式で提出される教材は取扱ひ方が考えられないかの如くである。ラジオ放送の中には絶えず聞いていることによつて長い間に心情を養うものもあれば、考える材料を提出している場合もあり、その他様々な利用の仕方をすべきものがあるのにそういうことは殆んど考えられていないのである。これは特に顯著な例をあげたのであるが、このようなことは映画のような視覚教材を利用した学習の場合にも常に感ずることである。映画や幻燈のような視覚的な方法で提出される教材は、極めて具体的なものが表現されているのであつて、そういう具体的なものの中にある一般的な原理法則を発見させることを目的として構成されたものが多いのである。所がそういうものがただ憶える

ものとして利用されている場合が多いのである。例えば海上輸送という題材の社会科のための教材映画がある。これの中に船が汽車の輸送より何倍も輸送力があることを描いた所がある。子供は例によつて、ノートに鉛筆でもつて、この船は一度に貨物列車の何両分の石炭を運搬することが出来るということを書きとめる。それが学習なのである。馬鹿々々しいことである。この船はたまたま貨車何両分であつたかも知れないが他の船はまたそれとは異なるであろう。貨車の容積だつて決して一様でない。そんなことをおぼえても何にもならぬのであつて、その材料を目の前において海上と陸上の輸送の比較をして考えるのである。考える材料が提出されているのに、考えさせようとしなくて、殺して使っているのである。そうしてそれに疑問も何も感じない。ここまでおぼえさせる教育に徹すればまた何をか言わんやである。

こういう教師の行動の仕方、民主学習指導に於ける教材利用の仕方の根底にあるものは何と言つても過去数十年來の注入教育主義であり、教科書学習主義であろう。我々の周囲にある様々な人間形成の媒介物となり得るものが、すべて一色にぬりつぶされて、おぼえるものとしてしか見られないという単細胞式頭脳をつくりあげたのである。かくして豊かな人間を形成するべき教育が、逆に何でも覚えさせらればよいという貧困な人間をつくり行つて行く。考え、行動し、感じる人間でなく、ただ受けとる人間をつくり行っている。

(II)

このような症状を教材不感症といったらよいであろうか。教材不感症は現在の学習のあらゆる教科に於てみられる。

例えば国語である。国語の教材でさすがに詩と散文と取扱いは多少異っているのは見られるが、(もちろん本格的取扱いが出来ているというわけではない) 散文の中に様々な形式のものになるともう区別がつかないのである。如何なる教材でも朗読をし、黙読をさせ、指名

読みをさせ、内容についての話しあいと終るのである。もちろん文字の書き方と語句の解釈位は行つたが、総じて何となしに始めから終りまでわけもなく読んでいるだけである。絵に例えていうと、それぞれの絵は個性的な構図をもっているのである。それに応じて分析をするのであるが、学習をみてもそういう構図の分析がないのである。心情を表現した文章があれば、それは如何なる表現形式によつて表現されているかを読みとらせなければ、言語教育にはならぬのである。また人物の伝記や性格を表現したものであれば、それは如何なる構図によつて人物を描いているかを分析しなければならぬのである。所がそういう表現の問題は何所かへ行つてしまつて、ただ内容となつて人物のことが表現とは別に離れて取扱われているにすぎないという学習が多いのである。こういう風に教材のねらいが忘れられて、ぼやけてしまふのは教師が取扱つている教材に対して、何等明確な意識をもたず、その教材によつて子供に如何なることを考えさせたり、やらせたりするかが、漠然としているからなのである。

算数でもこのようなことは多い。小学校の三年位の所に重さをはかる学習がある。よく見かける学習に、子供に何もなをもつてこさせて、自動秤を置いてその上に何もをのせて目盛を読ませる。そして教師が教えることは、はかりの上にもを静かにのせるのだとか目盛のよみ方をどうするのだとかである。せつかくいをもつてきてその重さを比較させようとする基本的な取扱いはすっかりどこかへ行つてしまつていたのである。物の重さをはかるというには、一定の単位の間隔と比べてそれがいくつあるというように比較することが、重さをはかる根本なのである。何もを持って来させてそれをはかるということは、そういう基本的な数学的考え方をはつきりさせるためなのである。所がそういう取扱いはどこかへかくれて、何もを取扱う技術だけが学習されている。

要するに数量的な処理の仕方の根本的な考え方がなくて子供に何

をやらせるかはつきりしないで教材が取扱われているのである。教材を取扱う狙いが無いといってもよいであろう。

このように考えて来ると際限がないけれども、社会科や理科についても考えてみよう。例えば四年あたりによくある単元で郷土の産業などというのがある。教師は郷土の産業の種類、生産物の種目、産額等々といったものをおぼえさせる。また産業の現場を見学して来る。そして何をどうやってつくっていたかなどを子供に絵にかかせたり、表につくらせたりする。そういう場合の学習をみると、結局郷土の産業の種類をおぼえ、産物をおぼえ、産額をおぼえ、生産の過程をおぼえるだけといった学習が多いのである。ここに提出される教材である表にしても、絵にしても、現場にしてもその数字なり形なり表面的なものをおぼえるためのものとしか考えられていない。が社会学習に於て大切なことは、そういう教材をつかつて、社会の現象を一つの原理法則のものにまとめてみるということである。原理法則といっても何もむつかしいことでない。自分の郷土の産業に大切なものは農業である、何故重要であるのか、産額からみて八割までがそれであるとか、その生産のやり方は他の地域と比較すると進歩している。その点はどこにあらわれているとかいうことを考えて整理して行くのである。いわば断片的な材料の一つ一つをおぼえるのではなく、それらを一つのつながりあるものとして構造づけて行くことだとも言えよう。所が多くの社会学習をみると断片的な材料をみておぼえさせているか、そうでなければ、材料も何もなくて、観念を注入しているか、どちらにしても教材というものに対して全然不感性なのである。要するに社会現象を表現するような教材を使わないで、社会学習をしようというのだから、奇妙なことである。

理科にしてもこのような状態は同様である。実験などをみるとそれが最もよくあらわれている。ただ実験という形式だけが問題になっていて、そこにあらわれた現象は考えられてはいないが、併し実験も観

察もしないで、言葉をおしえている理科が多いのであるから、多少とも実験すればよい方だと言わざるを得ない。自然現象を対象として考えない自然学習が平然として横行しているのである。これもまた教材不感性だといつてよからう。

このようにして、あらゆる学習が、ただ形だけで行われていて、本質的に成立っていないのである。国語の学習といつても、言語表現を問題にするのではなく書かれてあるものをただ読んでいるということであり、理科や社会科の教科書を読んでいるのと大して差異がない。ということとは、理科や社会科も国語の学習と大してかわりがない。殆んどすべての教科が言葉を使って文字表現で内容があらわされているから、みんなそれを読んでいるということになって教科の区別など現実には成立っていないのである。未分化なのである。全く困ったことである。

(三)

最近教材に対する関心も起つて来たが、教材を問題にするときにまず第一に重要なことは、最初に述べた所のその教材を如何なるねらいで子供に提出するかということの自覚である。文字で表現されていれば、どんなものでも読んで内容を説明するというような未分化な頭では、いくら教材を問題にしても所詮意味なしである。ということとは、実は教科のねらいをはつきりさせておくことで、極く当然のことである。所が教科のねらいをはつきりさせるといふようなことを聞くと、今度はそれをまた学習指導要領とか、学者の著書だとかを読んでわかってとうとする。それももとより必要であろうが、さてそれで教材問題になると一向その教材のねらいについて勉強したことが働かないのである。教科のねらいは教科のねらいとして観念的におぼえている、教材を考えるときはそれは働かない、では困るのである。こういう教師の勉強の仕方こそ外ならぬ教科書学習的であつて、その欠陥が、こ

こにはつきり出て、教材研究の場に役に立たないということになっているのである。

教科のねらいをはつきりさせるといふことも、実は教材を選択し、分析するその場の所で、具体的に勉強されていかななくてはならないのである。例えばこの文字表現を使ってあらわされた教材は、言語教材としては如何に利用さるべきか、それは言語教育のねらいのどこに位置づくか、内容を問題として社会科の中で利用するとすれば、どこに位置づくのか、その利用の方法如何というように、具体的に教材を提出する立場に立つて教科のねらいが研究さるべきである。こうして具体的な教材一つ一つを取扱って教科のねらいを明らかにしてゆくことに於て、はじめて教科のねらいがわかって来るのである。

教科のねらいは学習指導要領に書かれていると考えることが、一つの大きな迷妄であることを考えなければならぬ。それは結局は現実の学習を通じてわかって来るのであって、学習指導要領は、そういうものに入っていく入口にしか過ぎないのである。

更に学習指導要領に於ける各教科の目標をみると、各教科それぞれに知識理解、態度、技能が考えられていて、何等教科の間に差異がないかの如くである。これがまた混乱のもとである。例えば国語の文章を読ませ言語表現に関する学習をさせるけれども、そこに内容の理解もさせる。例えば社会現象が取扱われて居れば、それに対する理解もさせるし、また情操を養う態度もつくと考えてくると、何所に重点があるか、わからなくなつて来る。そう考えることは誤りではないけれど

も、これらは何れも同じ重みで考えられるのではないのである。それを言語教材として使えば、言語の訓練を行う間に、自ら内容も理解され、態度情操もにじみ出るのである。そうしてにじみ出ることで満足すべきなのである。目標の中心は言語表現に対する訓練であるのである。同時に二つのことを人間は出来ないものである。それだからこそ、

また様々な教科がそれぞれの視点で成立つて教材をその視点から構成し利用して行っているのである。

このようにして、学習の具体的なねらいをはつきりさせ、そこに如何なる教材を提出すべきかを考えるのであるが、その場合に、その教材と子供との関係の仕方が明確にされなければならない。ひらたくいえば、その教材に対して子供は考えるのか、練習するのか、感じるのか、といったようなことである。これは学習活動の方式を考えることだといつてもよいが教材——子供の関係形式に於て具体的に考えることである。どういう対象にどの子供は働きかけ、その働きかけを通じて何を自覚してくるのか身につけて来るのかといったことである。

われわれは現在あらゆることを言葉で説明しそれでわかることが教育の一番近い道だと考えている。場合によればそれは誤りではないであろう。しかしそれだけですべてではない。そういう理解でなく練習を繰返さなければ形成されぬものもある。時間をかけなければ養われぬものもある。行動しなければ身につかぬものもある。そのような様々な人間の形成の方式があるのであって、学習のねらいをこの人間形成の方式から考えて具体化する道を教材と子供との関係方式としてつくりあげるのである。こうしてはじめて教育が具体化してくるのである。

教材研究の視点は、ただ教材だけを抽象してひねくり廻しているのではなく、人間形成の全体的方式から、教育の目標、学習活動との関連を考え、そういう全体の教育の場に教材を位置づけて考えることなのである。それは教材という視点から教育の全面を眺めるといふことなのである。

(国立教育研究所員)